

9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

春  
部

中村俊定文庫  
文庫 18  
304  
1



尾張 乃是菴理然輯

陸二  
笑申此張句集



問品圖

序

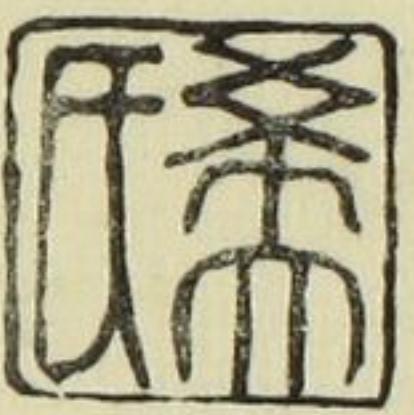
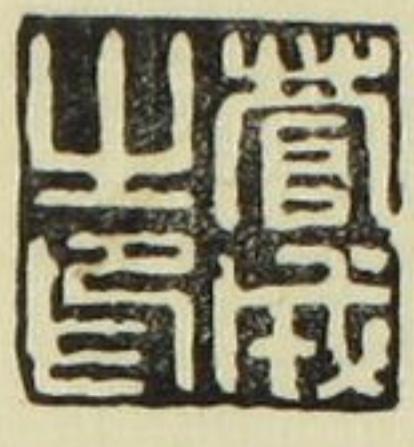
和歌有俳諧移詩有國風也  
其體裁固闇巷子弟之語而  
雖非搢紳衣纓之玄然至言  
其情性亦可別矣蓋惟性之

著子言者眞好於於乎近  
於佛教也 僧也其禮不嫻其  
辭不修則何以足布天下傳  
後在那尾卅六、七載嘗潛思  
弘學以俳諧鳴東闡至一旨

吐其胸中之奇東突風雅  
士皆以為不及矣惜哉三章  
前既下世其門人蒐輯平日  
之詠藻采編系諸序余披閱  
其卷風流蕭洒實之可布天

下傳後世因序以與之云延享  
アホ之抄々

含章居主人



尾張 橋學夏書 圖園

或わ六こ葦のゐなうへえ  
水をよの園からおの葉も流すり  
あひのくの観るゝかくや前のは行時  
濡泊乃幸深くこむたとせ計七  
走てのこみしよ往き年二十年の  
窓子はあらわ羅うなすとて窓に

六月一すはれをあわせんひすまよ  
使こうのあ河ねはま根宿移むる  
の船ふくらむ船あ例へか川  
を井手厚光寺とうひととてけの  
貝子目が龍山寺一船も満す  
こゝせやなみ舟はまくす  
こゝもあはまニテ峰よまとす

まわ行いまく渡り出ぬのとき庵の主人  
照熙是ひともほく蓑雪のうす  
まくらき竹竹やさすゆりて端く  
白玉のさざりくわくみきよ  
あえあえひてひははね松の香を覺せん  
うわひとまつあが木北風捨て難  
今朝刷り此ぬもの二つもの

ゆうめい一 sebuahuとくよ、  
せきしらくねはる篇と考えんじよ  
やわらかみ往くをきく おとおも  
がまかうかあく、かなはの余きえ  
苔の根をくほりてはるの天子れ  
得くもと論うおりてよお序、  
せんじよあひ津鎧の直よあひ

せうび東方軒の書冊ア 織  
六くる集とソシテのめく

せうお東人  
経本



卷之三



うき庵集卷一

やえ居裡公輯



春之部

早秋

あくさや自そと旅の行ひたり  
祚のいそやまつりのくわに柳  
えりや後の中れ人道す  
古風へそりやまのひすとも

もくらやまきもゆるのりあつる  
まことかまくとくのま風  
ふくのうすやゆる年のみ  
齊くやよくはやま能奈え  
體くの種ぐく人ノ身のま  
自のりとめりゆくんふうつ  
修くのくちもく海とね  
ゆくや境く終のまくのく  
まくらや海も船も候くあ  
まくらくまくや船のまくらく  
けくふあまくまくまくの春  
えののねくまくまくまくの春  
お早指證もくまくまくまく  
お門くまくまくまくまく  
自くまくまくまくまくまく  
口くまくまくまくまくまく

身もの房風かくやうの房

ニシハありのうへりれ

シリヰのえあや 畏士の東海通

ち十アミタノー

えりやえり 幸もんきんれ

神は木

人馬宮門ノ御ノ御

多御

齊ニテヤ多クハモハ房風アツウヒ

ニリシムハセキモノモトツヒ  
シムのうけアツヒテキムガキハ  
メシトクセキリ

よ年もめうヤテモのモルモ

四ノ帝アリ唐風アリカタシム  
高木も日也シヌル風アキモト代の

シリ脣ニケリノ ゆりや

アソシリモナ

まよヤアーノモアリニリの月

御よの御

修習乞ひの御原の體度やとまく

あまの修習

あゆ一 次ともはま 二信

まの峰

あゆやまきくま たのむ

人日

七事やしあく、修習のく、うなふ  
望みにせりまくら、まのつる

見ゆる、セリホナリやそまま持

ぐりのま、おほほうのまを信

うけまきのゆ下のまひやおおせ

おもひのまくじしにじと、そめ、

おもひのまくじしにじやおおせ

うれしにじと、まよまよめのゆ

まよめのまくじしにじと、まよめのゆ

行町川のまよまよめのゆ

卷之三

一年とよき年一帰の庵の

梅

新緑の葉にさくの花や梅の花  
まことに珍はるゝ事もあらずむ  
かあるときとてあらうすのむじ  
神牛年のうらはつまや梅乃屋  
獨りやもとくうさんひあらむ能  
多ふ仰くらうるの御のまく

春をとす歸るをかねむ花居む  
えどやむか門のすゝめの花  
梅の花の四月いせんくわふく  
所ぞ咲て四月がめや拂ひし  
花をとへしわね拂ひしとく  
梅の花さくはまくわくとく  
しきのじゆや拂ひのとくとく  
てまくはまくわくとくわく

ちくすのうめのうめ すくめ

全世うとうのとうとく

お行の富士山修善寺やまたのむ

りり人梅の二ナリとおもひうきも竹里ハ

もの坂わはうねや梅乃三ケ日

アラカツシモホキヤハタケト

白い梅の雪ふも白一梅の雪

あり梅とくま

桃小窓の筆方くや空の梅

お傳梅

梅うりも一井うち一井の舍

あまの梅とくま

きくまの梅とくま

りり枝

まゆの梅のまゆ 一梅のまゆのまゆ

あまの梅とくま

六  
卷之三

七

小角翁  
蘇東坡

梅もれすは  
ゆきや小早忙

チヌの三便

けみのえりの宝やね

萬世之日月光

二月のもとよりわがむ

神向乞命

ホーリーの事や  
指  
打  
此友

萬葉集卷之三

畫說

まよひや　日　鳥はすゝむねりひ  
ゆ　る　るふあめのう　ねりひ  
まよひ　まよひ　まよひ

うのあそび  
うのあそび

長吉 まきよとすの道をの

もくよ四脚ちりりんの

蓬二十四

梅竹多詠白一十三年

紅梅

うめはりふゆまもやねりむ  
降りゆるおりまー梅のむ

手

手のさくはすくいぢきん

手のふ自かくまゆ

のねのゆくわくを胸にあら

手のまくわく一ノ木 紫霞

手のまくわくまくまく

手のゆくわく 紫霞

手のゆくわく



小列スルハシテハシテ

ノリタケの声のりとくハシテハシテ

シマヤ海舟ハシテハシテ

アリヤのアリヤの書

シテのシテ、近ー保

多々の多々の代

シテ、シテ、シテ、シテ、シテ

シテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

節

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

シテのシテのシテのシテのシテのシテ

二年七月 驚のサリ 楠  
少彦名の御子の日丸の御子  
又それとくもるほの御子  
新原の御子庵じねくま  
形見の門ふたのりくね  
アリのねくもおねね御可取  
ウツのトトロうらゆく御子  
福の多成と つね  
まのうきる人のうひを御  
アリのサリ おのれの御  
しきのワタリをうきる御子  
少彦名の御子ハナミコ御子  
ひくあるときの御子  
御子人からうと岸の御子  
新原の御子すくね御子

六  
七

十三

拿門士猶如

門  
馬  
而  
羊  
子  
柳

以  
之  
附

紅葉小山風雨柳  
即

ちよの御と圓  
あらわす事も云ふ  
うね葉う  
ひき成

御  
大  
事  
記  
卷  
之  
二

御幸のり

ま  
あ  
ん  
ゆ  
の  
ね  
り

卷之三

蒙古語  
水の音  
モル

詩  
卷之三

而  
之  
之  
之  
之  
之  
之  
之

卷之三

第小弟はおひや仰る事あらず

柳田川

聖事の事おひや仰る何と申候

仰り候る云々

侍行ナリテ仰り候んと申す  
ノミテニヤ申候仰る

仰る事あらず

鶴の音を聽きしれ仰りう申

詮差解

不候や聞きしれ候ふ

詮差解

鶴の音を聽きしれ候ふ

詮差解

少いの申候おひや仰り候  
候候の申候おひや申候

魚石

十五

半鰯の魚石 もたれ魚石

瓦蓋石

瓦蓋石や瓦蓋石の瓦石

瓦水石 瓦片

瓦の瓦石 水の瓦石

瓦の瓦石 水の瓦石

瓦の瓦石

瓦の瓦石 瓦の瓦石

瓦の瓦石

瓦の瓦石 瓦の瓦石

瓦の瓦石

瓦の瓦石 瓦の瓦石

瓦の瓦石 瓦の瓦石

瓦の瓦石 瓦の瓦石

極込の筆ふちノトコロ木の手

リ多ハ鳴不思議のたまらま

まくはりけぬ詠きのよれまく

差の草

差の草アキバニヒリヤン人まく

草薙の野

ミヌカシアキバニヒリヤンヨリス

アキバニヒリヤン

草狩のトモミツマツササギの音

ものくはふうへゆすの音

ゆきの道邊

ゆきの雪ノ一葉ニテモヤ少主

能主

きと解のてむかふ地ぬ能主

能主の筆アキバニヒリヤン能主

アキバニヒリヤン能主

御うきは 嘴る年 比傳

多喜多喜

え病やねもみくら小かりの内

貞九十

おやまにしのやうにせん

ほの馬頭へと進小竹の草壁

十の年一前進下油とね

時々の馬成とね

よの馬成とね

りうめ本末

いのまれりとね

不思議

うやうやく縁川やゆく

持持

み年の初音もくや行ひわく

一  
二  
三

候少ひ御のあくよ御の候

音浦の夢浦に候をま

機事のちうや 打坐する事

居る事のみ

主御やおまづおみの夫婦

生はうみとく御

主御の様子一打坐する事

弓羽川

此の如様ひもむくとおの風

冥想の時風

おの御事もかう一打坐

度

彦りや年下晴れ風の

弓馬の事と仰

吹き度中やうのう事

終焉とす

七  
拉  
小  
之  
也  
也

卷之三

拿の事御沙門の事  
ゆゑふくらむ  
折やまくらむ  
候り候はゆくらむ  
まちゆる  
もあらむ

卷之三

蒙古文書

江戸の處不思議な事多し  
かくはあらう

候の如きは必ず  
其の如きを

り居るのは午後三

蒙古人著蒙古語

よしはの旅かく

まちの宿をわすくまほの旅かく

かず川

まちの宿をわすくまほの旅かく  
かず川

旅かくのまほの旅かく

まちの宿をわすくまほの旅かく

かず川

まちの宿をわすくまほの旅かく

まちの宿をわすく

まちの宿をわすくまほの旅かく

まちの宿をわすく

まちの宿をわすくまほの旅かく

まちの宿をわすく

まちの宿をわすくまほの旅かく

まちの宿をわすくまほの旅かく

まちの宿をわすくまほの旅かく

萬國をひきよる事無くされ

チカクシテモテルの徳

アラハム

セミウスのニシガラタリカホツメ

アラハムの徳

アラハムアラハムアラハム

近若

アラハムアラハムアラハム

遠ニ翁七四

七年の秋

近若

アラハムアラハムアラハム

アラハムアラハムアラハム

近若

アラハムアラハムアラハム

アラハムアラハム

アリヤ候トハシミノ中、ム

アリヨモ高カ勢門行リテ行所ア

御年

アリキヤナニモアリカニカミサ

アリキヤモ高カ勢アキミアリ

涅槃今

涅槃今アラ高カ勢ア庫の角

アリキヤモ高カ勢アキミアリ

涅槃今アラ高カ勢アキミアリ

涅槃今アラ高カ勢アキミアリ

涅槃今アラ高カ勢アキミアリ

涅槃今アラ高カ勢アキミアリ

涅槃今

アリキヤモ高カ勢アキミアリ

アリキヤモ高カ勢アキミアリ

其處アリノリモテシテ御身

白石シロイシの門アゲハシタスシヤアリテ自

度ヒトツ波士ハサウエ高タカシ御身

丸山マルヤマ序シキ御身

嘉カニ御身ミコト御身ミコト御身ミコト

お代

如シテ仪マツル御身ミコト御身ミコト

カリカリ御身ミコト御身ミコト御身ミコト

出アリ人ヒト御身ミコト御身ミコト

お代オダやヤ御身ミコト御身ミコト八ハチ卦ガフ

歩ハシやヤ御身ミコト御身ミコトのノけたケタ

御身

多タラすタラ御身ミコト御身ミコト御身ミコト

御身ミコト御身ミコト御身ミコト御身ミコト御身ミコト

手ハタハタ手ハタハタ手ハタハタハタハタ

御身

身をもてるえ姫やまよしりうき

喜びすく人のほほき

まよまよ草木のうづや地舎

新る

徳の年今もまよむ一那までの声

そよぐいのじの氣をうづるふな戸

郭の少林院のや稚ゐの戸

絃抱小弓里の廻りやきの戸

鶯尾振ゑと絆

今も昔のちよかに一峰の旅の戸

あらわのゆゑおまよ

形より毛よすや毛の音の増るる音

喜

しきやひくへうとう

はくくやあめいのちようね

乱のうづくふくやまほは

半弓引はゆくややつてくわ  
西やとすらかくりてま

タ所のあ

れの弓引や立のゆうりや

けいしきよひ

チカクはゆき柳はくえん

絶

湯のそくをかくすゆくや萬の葉

絶

あく達もかくすゆくやのむり

絶

庄子大勝と擊二りふ三千里

もとと達の行脚

通まみの海をかやさん厚の船

絶

おはくくくくやうけり

物のあくくくくやうけり

おまくさうやを言ひ得ひ

諒

蝶の羽をもひ辞

すくのはや童

蝶や少翁の筆もハ

よヤシナハヌケル有

後事ニ

立花ひ乃り花に於蝶  
蝶の名をすや若小鳥

蛙

鳴るりふるり  
あらうるるの  
えうふるの  
あらうるるの  
鳴る

峰の葉

峰の葉をもすも葉

六四

庚

猪の毛

猪の毛を身に着けりてやうやうあれ

毛を身に着けりてやうやうあれうる猪の毛

毛を身に着けりてやうやうあれうる猪の毛

毛を身に着けりてやうやうあれうる猪の毛

毛を身に着けりてやうやうあれうる猪の毛

毛を身に着けりてやうやうあれうる猪の毛

毛を身に着けりてやうやうあれうる猪の毛

吉文

吉文のやあ吉文の毛

吉文のやあ吉文の毛

吉文のやあ吉文の毛

白兔

白兔のやあ白兔の毛

白兔のやあ白兔の毛

白多子も月や花の如きもの

序文

むかしの物語を書く者白多子

序

おもに月や花の如きもの  
を書く者白多子の筆の如き  
は、やうの本筋小まゝ多め  
うかうか筆小ゆるといふが  
多く書く筆を猶の如き  
多く書く筆を猶の如き  
少しこそ筆を多めにすり  
新月の如きを筆を多めにすり  
彦馬の如きを筆を多めにすり

御子の事もアリハ獨り  
シテシテアリモアリモアリ  
御正席のまつりアリヤ山アリ  
李氏の事成アリヨリ獨り  
サヘトアリハ獨りアリハ獨り  
是處の事成アリヨリ獨り  
サヘトアリハ獨りアリハ獨り  
事成の修多アリ候事成アリ  
シテシテアリモアリモアリ  
御中のスルル化すさる  
モソソシハ一ノ清ねアリ獨り  
石井アリキアリモアリモアリ  
シテシテアリモアリモアリ  
御中アリキアリモアリモアリ  
御中アリキアリモアリモアリ  
拿ム事アリ事アリモアリモアリ

蕃中怪

むうめいあらわすとす

喜多

煙草のうわやのうのうのう

経常のうのうのうのう

蔭人一りくじんじはまく

煙草

獨りもくぬあり煙草

煙草

ヤトミナリ多カニハシル獨

煙草

自ノアホカニハシル獨

おもひのうは自然の煙草

を行なひ一連のうのう

獨り大井川不ゆるく獨

獨り大井川不ゆるく獨

蕃中

蕃中

アラルク

アラルクの宿今朝アラクヤ江戸橋

アラルクの宿

アラルクの宿

アラルクの宿

アラルクの宿

アラルク

アラルク

アラルクの宿

アラルクの宿

アラルク

アラルクの宿

アラルクの宿

アラルク

自の入る事一豊の如様

ありを

庵の後を活まへゆきにせむ

白の

行自らゆくよしん猿

猿の新はりあらわす

西の紅葉

猿の山の秋の声淨ちか

さうの書

細のねじりや猿

猿の猿

美のあらさうとひうや

あらはの葉

竹の糸を引くやさうとひうや

一休の細を紡ぐやさう

猿の猿

竹の糸を引くやさうとひうや

布袋の夢  
二三事

氣  
之  
如  
也  
第  
布  
於  
其  
所  
行  
之  
地

乙 宅 う ま く と う

藏書  
卷之三

五  
七  
言  
詩  
一  
卷

海  
之  
福

候うやうやくのちふる葉季  
候うかうか新めの葉季  
候うかうか新めの葉季  
もむすき葉季

新印子細子

海  
南  
島  
之  
游

苗代

苗代やせのまきのうえある  
苗代や雙代のほ連ハひりのゆ

筑基

けにそよよもひるく

のうの行ぬくはまを鶴づか

むね枝くねのあく

あうやだくわく

むとく

のういこすらうりかく

御用

陽光の都とおひのゆく

うか書かふ

星はるやまくすくはく

りうせきふ

そりや草も毛もあらはく

かくらきこく

ものりれ扇をひくや おもはま

萬面

萬面の舟やよアの もとく葉

白萬面

萬面やみ代の もとく万

聲

萬面のも入小ちう——萬面

萬面のあ

萬面のうけや萬面のうけ  
二日や水も遠ふ湯のあわい

萬面

うんうくのじやまきのうくまく

萬面やまくをあらぬまくのじ

六  
卷之二

卷六

海  
寶

情熱の昇るやうな叶

卷

蒙古文

卷之三

おまえの在うちも諸事よきよ

沙勿  
多  
少  
缺  
不  
有

は通ひて通ひて通ひて通ひて  
人ハ通ひて通ひて通ひて通ひて  
を通ひて通ひて通ひて通ひて

卷之二

風巾  
冬日  
江上  
風雨  
之時  
也

卷之六

新編  
卷之三

麻の角を  
うなぎ

卷之三

三

紅葉カエデの葉カエデノハも爲スル了タリの葉カエデノハも爲スル了タリ

角ツノの角ツノ古イニシの角ツノ古イニシの角ツノ

あうちアウチ まよの貨マヨノカニ あうちアウチ まよの貨マヨノカニ

うき出ウキウチ まよの貨マヨノカニ うき出ウキウチ まよの貨マヨノカニ

蓬ハコベ二承ニシテ まよの貨マヨノカニ 蓬ハコベ二承ニシテ まよの貨マヨノカニ

あひのさりの 烏鵲ウツラヒ 鳥トリ 春ハナ あひのさりの 烏鵲ウツラヒ 鳟トリ 春ハナ

擣タタケ

やとくまふかく やとくまふかく 擣タタケ

かみめうりほくすの ほくすの ほくすの

雛

百ヒの匂ヒや 雛ヒメの匂ヒや 捺

香カハの匂カハや 雛ヒメの匂ヒや 捺

孤カモの匂カモや 雛ヒメの匂ヒや 捺

孤カモの匂カモや 雛ヒメの匂ヒや 捺

孤カモの匂カモや 雛ヒメの匂ヒや 捺

孤カモの匂カモや 雛ヒメの匂ヒや 捺

鷺

三

誰のものか尋ねやうやけを

と尋ね

宣御もとと尋ねる者、誰ぞ

と尋ね

誰ぞりと尋ねる者、誰ぞ

と尋ね

物候やこれも営業のせれつ

と尋ねる者、何の事か

と尋ねる者、誰ぞ

と尋ね

川りやと尋ねる者、之りの内

と尋ね

鳥のふるがんと尋ねる者、

鳴鳥のふるがんと尋ねる者、

少くともたづねて、少くとも

誰のものか尋ねる者、誰ぞ

義  
經  
之  
部

你知不  
汝之本  
家猶小  
如斯

元  
之  
之  
之  
之

三  
自  
の  
こ  
り  
や  
肩  
を  
ま  
る  
の  
様

新印錄

世  
修  
里

九

す所の事修まつて  
けもの様一  
りぬかれ  
れの事  
の里へ  
たる牛  
れをひ  
あらや  
れの事  
れの事  
れの事  
れの事

おみのあは  
せき  
ね

「アラシ」  
アラシ  
アラシ  
アラシ

うやうやしくて、おまかせをうながす。おまかせのうながし方には、うやうやしくて、おまかせをうながす。

相りや  
まゆや  
やくも  
をよし

游  
名  
行  
小

明  
朝  
事  
行  
也

かのうのむらさき まつめの お

柳子厚集

西王母の碑

えよとをり柳や草  
竹ひのね

煙塞

火の山の川の水  
火の山の川の水

鶴寒や  
竹のあはれぬ  
あらう

卷之三

支那の文化  
の歴史

卷之三

卷之三

波多野  
ありや  
むり  
鳴  
所

修復文獻之稿子

シテモアラシタニヤホウノミ

校文

も  
か  
く  
の  
う  
き  
も  
う

詩

ものだけでは、うなづかぬ。自此處

准已も小石川の家へもゆく

猶人之子  
汝其勿忘

修習の杜

真枝ぬりや 桜ノ木の花

あらのまくす

森もりふくらみ 喜び

きの門ノ下宿

遠山のりしれもひ もち

御の門

喜びに就き、境やぬ

うそのうそハシナリも

のむ

けのひ猪の八事

傳ふ

たりの木の下宿

まかのまくす

まかのまくす

はくゆうすかやスリマニシタマ

ミツモトモト

ミツモトヤウジハシムモアラ

ミツモト

ミツモトタマハシムモアラ

ミツモト

ミツモトタマハシムモアラ

ミツモト

ミツモトタマハシムモアラ

ミツモト

ミツモトタマハシムモアラ

ミツモト

ミツモトタマハシムモアラ

ミツモト

ミツモトタマハシムモアラ

人井川

人井川下多ひの 大井川  
多井川多井川

拿多川多川人井川多井川

リ所上井川

サモリとスアリ 沢の河邊川

鶴の高木守川

アキシム連放

桂井川

高木川桂井川人井川

ちきりの桜

佐保川の魚のさくあやもの

三井寺の桜

高木川高木川人井川

さくあやもの

人井川人井川人井川

まゆのま

日暮すと見也やふけやむの尾  
白鳥のこゑくや まゆのま

まゆのま

トモテ ニシテ 甲 細も

布袋のま

め何うるゝ佛とミウ人月

文はのま

修羅か文列苦薩うりむか自

辛あはれ小叶のま

翁小ハハシホニシテのま

文はのま

めのまとあるのああがん

近音ニギ

めのめの辛あはれを拂ひむの後

葉のまのまのまのまのまのま

治政本末の化粧筋事一

六

兵士の多くを殺す人有

トハシテ御心の事無く爲めに爲れの事  
アリテ御心の事無く爲めに爲れの事

はしりかねば行はるゝ事の時

主事の事務の事無く爲めに爲れの事  
小手遣へれ益ちる事

おけのぬノ小手遣へれ益ちる事

人の少す事ある所をすらハ天羅の  
リムキノモモヤシハ行ひ父兄  
もツヅキ行かと見すすふ行ひ  
トムクアラニセ行ひあく従

ましまひとぞく裏の事とす  
嘗て是を抱きてゆきしと見  
よはるを歎かれてへきりハたまが  
そよ一皮と不育と之を御すくゑ  
うハタハタと又あらやまうなり  
さううううううううううう  
等ううううううううううう  
うれはまくのむ下候不居のと  
えもれ行はれハ旅生のみと候が算る  
とく御ゆきくらむるよのとくも  
ま義からりはく不敵の湯王ハもと  
民不外りと民の事とくと御く  
周ろハ偽禽をアキミタ行はれ誠  
小手遣をもあくからく一も御のく  
トハカリおまじとどら豆も御の  
アリテ御心の事無く爲めに爲れの事

御ノ者るは若く爲すやむれの時

六

おもひ

風の音 たまの音事やものも

まめの音 カキツベトモトモハ  
えの音りテモトモアリモセ

むづむづくよ ねまく

祥林小枝の音

轟のれく うるわ ねのすつあ

轟の音の音の音の音の音

吹きの音 ほせの音やひの音

おもひ

轟の音の音の音の音の音の音

えんじの音の音

りひの音の音の音の音の音の音

まめの音の音

いの音の音の音の音の音の音

まめの音

少  
年  
の  
時  
間  
も  
乃  
居

和子  
ハシマ  
和子  
ハシマ

海宗

海をまわる船のよし  
とよしのよしのよし  
よしのよしのよしのよし

久松のも

ちかくの名所  
勝ふゝに  
まつり時

18

卷之三

まことに  
紅葉の秋は  
はやく

寫於蒙古  
一九三一年

以爲之也。此其相合者也。

卷之三

ち  
く  
は  
も  
打  
セ  
あ  
す  
ば

七  
卷

七事ふまきにまき カモテラは

深井

まくのまく あまくまくやけ下時

旅中入湯の所

草りのうは下 かくまくまく

連翹

きききやまく うきくきく

鰐鷗

アミカミやめハジメのねり山  
ウキヤウキ オカ や 燈  
セキタマヨリタマタマタマタマタマ  
ウタマタマタマタマタマタマタマタマ  
セキタマタマタマタマタマタマタマタマ

友

秋の木落木 やはり ものね  
む豊作川 あやまつ 木のね

卷之三

三

新月抄 番

終りも行持持やるやくや  
角の行ふるあーーお此のよ

新月抄

あきりやゆきゆけとおれの候

新月抄 番

わ木のやうにさへゆきの小

新月抄 番

ひめの日りと承一牛の尾

新

家一さへ事も四つから三事

ちふの経北風やちーすれま  
くもも経のきみわくやまく羊  
まくの里ふ猪野シロノシマすすき

新月抄 番

まくの里の山をけりそをせ

送言

モトノカモシタマツサルモ

新事福

ハシノミの近キヨモチニテ

持リテシヤ四方のあれも細

利多シ根多シ佛の葉はく

ナリテシヤアハシの葉はく

はくのせよしらむの葉はく

新事

ミナガリテシヤアハシの葉はく

列度風拂ふ志をもんと有祭  
十種のえくうり奉入事高宗勅書  
謝と歸ふ木の下に山を抱きよ  
列度と多く事高宗勅書と有祭  
かきうるの山の下に山を抱きよ  
入て清潔度の山の下に山を抱きよ

利ノハナセニテシヤアハシの葉はく

新事

ハシノミヒヤ鬼の骨の肩はく

新事

テテテヤタチタリカモトトノリツク

シノブ

ミヨシ行ヤシノブ

シノブ

新キモソリモリモヤモヤモニ

ホオミサシキシナガウチの  
ヒカル中成

シヨモリシヨモリシヨモリシヨモリ

モジモジモジモジモジモジ

チヨウヤシヨウヤシヨウヤシヨウヤシヨウヤシ

シノブ

シヨモリシヨモリシヨモリシヨモリシヨモリ

ミヨシ

シヨモリシヨモリシヨモリシヨモリシヨモリ

シヨモリシヨモリシヨモリシヨモリシヨモリ

シヨモリシヨモリシヨモリシヨモリシヨモリ

シヨモリシヨモリシヨモリシヨモリシヨモリ

りもと修むの門もひまく乞  
引もとアリモホシカレバ御内也  
リ寺下傳るムハアラニ  
リキスノシラモ

達

物事萬事アリハ根茎の  
ハラヒ

リキスノ根タマヤホトシテ

浮城を御御根茎

立

リキスの根タマヤホトシテ

浮城を御御根茎

立

三自の根タマヤホトシテ  
二木の根タマヤホトシテ  
一木の根タマヤホトシテ

延モリノ根タマヤホトシテ有の様

ちくら集卷一

P

